想い櫻

はるかぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想い櫻

【Ｎコード】
Ｎ７６０５Ｘ

【作者名】
はるかぱ

【あらすじ】
それは、遠い遠い昔のお話。
桜の精が人間の娘と恋をした。

序

さくらさくら・・・

もうすぐ春が来る

淡い色をした花弁が雪のように風に舞う

静かに、たおやかに

天女のまとう羽衣が風になびくような

そんな幻想を抱かせる春が来るのだ

お前を遠くへ連れていった春が来る

――――また、春が来る。

一　想い桜　一

「つぼみがついたか」

枝の先に現れた桜のつぼみを見つけて、咲耶(さくや)は誰に言うわけでもなくそう呟いた。
その瞳は心なしか悲しい光を宿している。

「もう・・・そんな季節なのだな」

そう言った咲耶(さくや)の瞳は、他のもの・・・そこにはない何かを映し出していた。

あれから何度目の春が来るのだろうか。

「桜乃(おうの)・・・俺はいつまで待てば良いのだ」

01

「咲耶(さくや)様」

どこからか自分の名を呼ぶ声がする。
その声には覚えがあった。
少しか細いが、しなやかで優しい声。聞けば心地の良くなる、そんな声だ。

樹齢五百年は優に超えようかという桜の大樹の上、その幹に寝そべっていた咲耶は、半身を起こすと地を見下ろした。
一人の娘が地面から咲耶を見上げている。
目が合うと、娘は満面の笑みを浮かべた。

「ああ、やはり。ここだと思いました」

「なぜ分かった」

咲耶は、ふわりと樹の上から娘の前へと降り立った。

「分かります。咲耶(さくや)様の事ですから」

そう言ってくすくすと笑う娘を見つめていると、愛おしさと気恥ずかしさとが複雑に入り混じり、何とも言えない気持ちになった。
そんな気持ちを誤魔化す様に、咲耶(さくや)は娘をそっと自分の方へ抱き寄

せると、上方を見上げ軽く地を蹴った。
その瞬間、娘は慌てて咲耶の着物にしがみつくと、ギュッと目を閉じた。

「着いたぞ」

そこは、先ほどまで咲耶が寝そべっていた桜の幹の上。
娘を腕に抱いたまま、幹に腰掛けたが、娘はまだ目を閉じたまま着物にしがみついている。
しがみついたままの娘に、そう声をかけると、しばらくしてゆっくりと瞳を開けた。
それからきょろきょろと周囲を見渡し、ここがさっきまで自分がいた場所の真上…桜の樹の上だと確認すると、ほっと息をついて、着物にしがみついていた手の力を緩めた。
それから咲耶を見上げると、たしなめるように口を開いた。

「咲耶様！　急に何処かへ跳ぶのは駄目ですと、以前申したではありませんか」
「…そうだったか？」
「・・・」

あの時、分かったとおっしゃったのに。
咲耶（さくや）の、どこかとぼけたような態度を見て、半ば拗ねたようにそう呟いた娘は、恨めしそうに咲耶を見つめると軽くため息をついた。
そして、気を取り直すと体の向きを変え、幹の上からの景色を眺め、微笑んだ。

「今日は良い天気なので、遠くまで見渡せますね」

果てまで広がる青い空。
雲ひとつない穏やかな天気。
遠くには濃淡鮮やかな緑の山々。
眼下に広がるまだ咲き始めたばかりの桜と、黄色の菜の花群。

全ての色彩が美しい。

咲耶は娘の言葉に頷くと、目を細めてその景色を見渡した。

そして思い出す。

この娘…桜乃(おうの)と出会ったのも、こんな穏やかな昼下がりだったと。

02（前書き）

回想シーンの中での回想になります（笑）なんて紛らわしい。

02

「貴方は・・・誰？」

一人の娘が、咲耶を見上げて不思議そうに首を傾げた。

咲耶は、返事に窮した。

思わず周辺の人の気配を探るが、この娘以外、人間の気配は感じられない。

ということは・・・

極めて特殊な状況に、咲耶は、自分を見上げてくる娘をただ見つめ返すことしか出来なかった。

いつまで経っても返事の返ってこない咲耶を見つめながらも、娘は苛立つ風もなく、さらに問いかけた。

「そんなに高い所に上って、危なくないのですか？」と。

しばらくして、咲耶が言葉に出せたのはたった一言。

「…お前は…私が見えるのか？」

娘はその言葉に一瞬不思議そうに首をかしげた。それから驚いたようにどんどんと目が見開かれていく。そして、慌てたようにきょろきょろと辺りを見回した。

「…もしかして、周りには貴方が見えていないのですか？」
その問いに頷くと、娘は一度息を吐いて、自身を落ち着けてからもう一度咲耶を見つめた。それから深々と礼をして見せた。
「初めまして、幽霊様。私は桜乃（おうの）と申します。」
「・・・」
何という変わった女だと思った。
怯えるでも逃げるでも、ましてや気を失うこともなく、ただ真っ直ぐ自分を見つめてきた女は初めてだった。
というよりも。
自分の姿を実体として見る事ができ、会話までした人間は初めてだ。
咲耶は、得も知れぬ感覚を覚えた。
体がぽぅとあたたかくなる――そう、まるで春が来て、初めて桜のつぼみが花開くような…そんな高揚感。
その感情が何なのか、その時の咲耶には分からなかったのだが。
「…あ」
小さく呟かれた声に、意識を目の前にいる桜乃へと戻す。
「これも貴方の力なの？」

「？」

瞳をキラキラと輝かせて、桜乃は咲耶のいる場所よりも少し右上を見上げている。

その視線を追って、咲耶は少し上を見上げた。

そこには、時季外れの桜が一輪、花開いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7605x/

想い櫻

2011年10月29日18時23分発行